

立教大学校とカレッジ教育

序

最近では、日本の大学や学院により「百年史」を名乗る書物の刊行が目立つようになった。ところが、「五十年史」をはじめ、「百年史」に先だって刊行された本には、それなりの味がある。古本としての価格もかえって高いものが多い。

たしかに新しいものには、歴史的な新事実が加わり、誤りが正され、古い歴史観が一掃されている。しかし、近い年代の記述は、資料に恵まれていたために多くの紙数がさかれ、その分、初期の記述が希薄になっている。その点、古いものは、教師にせよ学生にせよ、生身の人間が登場し、その人々の声が聞かれて、親しみやすい。

鈴木範久

古い歴史観も、古い歴史観自体が、今度は資料になる。文部省からは、今日までに、たびたび「学制史」が出されてきた。「学制」の歴史が中心であるから「大学史」や「学院史」とは異なるが、以前から、ときどき開いて見ているものに『学制五十年史』（一九二二）がある。先日、たまたま「第三章 第二期（明治五年の学制より同十二年の教育令まで）」から「第四章 第三期（明治十二年の教育令より同十九年の学校令まで）」におよぶ高等教育の部分を読み取っていた。そして長年の習癖で「立教」の名前を探していて気づいたことがある。

一八七二（明治五）年に公布された学制では、高等教育として、大学とともに専門学校の規定も置かれた。その結果、東京大学のほかに、多くの専門学校が設立をみ

た。ただし専門学校は、法学校、医学校、理学校、諸芸学校、鉱山学校、工業学校、農業学校、商業学校、獣医学校などとしたために、高度な実業学校になる。

こうして、今日の法政大学、専修大学、明治大学、早稲田大学、中央大学、関西大学、日本大学、独協大学などの前身となる専門学校が設立された。宗教の専門学校としても皇學館大學、駒沢大学、大谷大学、さらに同志社大学、青山学院大学などの前身校の名がみられる。

ところが、立教の名を冠した学校の名称は、次の「第五章 第四期（明治十九年の小学校令より同三十二年頃まで）」を含めても、どこにも見当たらない。立教と同じく名の見当たらない学校には慶応と明治学院とがある。そこで考えられる理由は、当時の立教などは、大学はもちろん、高度な実業学校の意味での専門学校には数えられなかったのではないか。それは、立教が「カレッジ」であったことによるのではなからうか。

コレジヨ

日本における大学の名称は、早くも養老令（七一八年）に定められた大学寮にさかのぼる。だが、ここでは、大学史そのものが目的でないので、カレッジと同一語源に属するキリシタン時代のコレジヨの略述から入りたい。

ザヴィエルとともに日本に帰国したアンジロウは、ゴアのサン・パウロ・コレジヨで学んでいる。そうなる日本人で最初にコレジヨと名づけられる学校の卒業生は、国外ではあるがアンジロウということになる。

来日したザヴィエルは、山口にコレジヨを設ける計画だけは有していた。しかし実現に至らなかった。それが具体化するのには巡察師ヴァリニャーノの提案による。コレジヨは、聖職者養成のためのセミナリオと比して、より高度な教育機関とみなされた。最初のコレジヨは府内に設けられ、一五八二年から講義が始められた。

コレジヨの教科をみると、神学や日本語は当然として、ラテン語、民俗学、哲学など広く人文科学、社会科学に及んでいる。あいつぐ戦乱などで、府内の地は数年で去り、山口、千々石、有家、加津佐、天草、長崎と場所を転々とする運命にさらされるが、当時の日本では、おそらく最高の西洋的学問の授けられたカレッジとみてよい（シリング著・岡本良知訳『日本における耶蘇会の学校制度』、東洋堂、一九四三。など）。

日本の大学寮

王政復古を掲げた明治維新を迎え、まず大学寮に範をとった大学寮の設立が唱えられた。その内容については

国学派、漢学派との間の抗争があったとされるが、ここでは述べない（大久保利謙『日本の大学』創元社、一九四三）。

一八六八（明治元）年、京都大学校が計画され名称のみ登場、しかし、ほどなくその計画は消える。一八六九年、復興された幕府の昌平学校が東京大学校に改められたが、当初は、教育施設だけでなく、のちの文部省にあたる官庁も兼ねたものだった。同年内に大学校は大学と改名。一八七一年に、ようやく文部省が設けられ、同時に大学も廃止となった。これらの詳細についても、ここでは省略する。ただ大学校という名称がみられたこと、それも大学と区別して用いられたものではなかったことだけ記しておく。

カロザースの築地大学校

他方、政府による大学の廃止に代わり、一八七三年、アメリカ長老教会の宣教師カロザース（Christopher Carothers）により築地大学校が設けられた。カロザースは一八六九年に来日、築地居留地に居住。長老、一致の各教派を超えた公会が、一八七二年に設立をみたが入せず、別に東京第一長老教会を組織しことで知られる。カロザースは、一八七二年に慶応義塾の英文学教師に

就任している。カロザースは一英語教師であったとはいえ、慶応義塾を世界的な大学にしようとする意気込みがみられた。そのことは、次のようなカリキュラム改革を慶応に行わせたことでわかる。

米人カロザース氏同人に托して、学科の仕組をば、左記の如く、総て米國「カレッジ」風に改めてよりは、従来の如く、単に英書を訳読するに止まらず、正則に英語英文を学ぶは勿論、地理、歴史、数学、物理、簿記、経済生理、修身等、一切原書を用ひて、其事柄を暗記せしむることゝなりし（『慶応義塾五十年史』、一九〇七）。

暗記はともかく、それまで訳読一本の授業を大幅に改め、広く教養を身につけさせようとした姿勢がみられる。なお、教師、生徒にギリシア、ラテンの古典語を教えたともされる。慶応を文字通りアメリカのカレッジに匹敵する学校にしようとしたとみてよい。ところが、カロザースの慶応在任期間は、翌年で終わっている。諸事につけ、やや強引な性格が指摘された人物であるので、それが災いしたのかもしれない。

慶応義塾を辞任した年、カロザースは築地入舟町に築地大学校を設けている。築地大学校については、キリス

ト教と英語が教授内容の中心であったとされているが、まだ不明な点が多い。同校に学んだ原胤昭によると、生徒は二、三百人あったとされるから、慶応で試みたカレッジ教育を施そうとしたのではなからうか。(「私と基督教」、『新旧時代』一一八、一九一五年一〇月)。さもなくれば築地大学の名前に負けてしまう。築地大学校は、カロザースが官立の広島英語学校に赴任する一八七六年でもって終わる。

バラの築地大学校

カロザースが広島に去って四年後の一八八〇(明治一三年)、築地居留地七番に、同じ築地大学校の名を持つ学校が、アメリカの長老派の手で開校された。以前、横浜にあったヘボン塾の後身である。校長にはジョン・C・バラ (John C. Ballagh) が就任したのでバラ学校とも呼ばれた。

教師はジョン・C・バラ以下、インブリー (William Imbrie)、フォールズ (Henry Faulds)、田村直臣などであった。九月の正式開校時には四五名の入学者がいた。年齢は一八歳が最多であることからみて、現在の大学新入生にあたりとみられる。学科は英学科と漢学科に分かれる。英学科は、予科三年、本科三年を修業年限として

いた。

英学科の科目(または教科書)をみると、予科では、英語の読本、会話のほか、万国史、米国史、英国史、仏国史、希臘史、羅馬史、十八史略、国史略、地理書、算術、代数学、幾何学、動物学、習字などである。本科に進むと、万国史、文明史、日本外史、八大家文、史学通論、万国公法、経済学、哲学史、修辞学、修身学、論理学、窮理学、精神学、代数学、幾何学、三角法、本草学、化学、博物学、地質学、生理学、天文学、比較運動学、英文学、米文学、文章軌範、耶蘇一代記、旧約史、耶蘇教証拠論などになる。

開校の翌年、『東京日日新聞』には、築地大学校が正規の大学でもないのに大学を名乗っているとの非難の投書が掲載されたが、カリキュラムで見ると、大学の名に恥じるものではない。また、同じ教派による東京一致神学校は、すでに一八七七年に築地一七番に発足していたから、キリスト教の教師を養成する必要はなかった。英学科といっても人文、社会、自然にわたるリベラル・アーツが多く設けられ、学生は、まさに充実したカレッジ教育を受けることができた。

一八八三年になり、築地大学校は、横浜の先志学校と合併して東京一致英和学校となる。「英和」の文字こそみられるものの、「普通学課程のカレッジをめざしてい

たもの」である点に変わりはなかった（以上、『明治学院五十年史』一九二七、『明治学院百年史』一九七七。など）。

築地入船町五丁目壹番地

立 教 学 校

束脩 無之

月謝 壹圓 月俸 貳圓貳分

立 教 学 校

アメリカ聖公会の宣教師C・M・ウイリアムス(Channing M. Williams)により、一八七四(明治七)二月三日、築地に小さな私塾が開かれた。ウイリアムスの私塾は、同年内に、すでに立教学校の名前をもっていた。このことは数年前に記したことがあるが(『納函紀念録』復刻版「解題」、二〇〇一)、いまだに立教学校の名称の初見を翌年とする記述が、依然として学校当局によっても記されている。そのため、まず、一八七四年に立教学校の名称の明記された広告を再掲しておきたい。それは『朝野新聞』一八七四年二月三日付の「報告」欄に掲載された次の広告である。『東京日日新聞』にも同日、まったく同文の広告が掲載されている。

米 国 教 師 三 名

右於当校從朝八時半至十二時半迄英
学教授有之ニ付入塾並ニ通学有志諸
君臨談有シコトヲ希ウ

「立教」という名の由来については、従来の指摘にある中国の經典「小学」による説よりも、大江滿氏が指摘したように中国聖公会の祈禱書『教会禱文』にある言葉によるものと筆者もみたい(大江滿『立教』一八八、二〇〇四年三月一日)。『教会禱文』の刊行年につき、矢崎健一氏は、遅くとも一八七二(明治五)年版があるうえ、「立教師」の文字のある『教会禱文』の立教大学所蔵本は、それ以前の刊行とみている(「朝晩禱文付リタニの研究」、『立教大学研究報告(人文科学)』九、一九六〇年二月一〇日)。

開校場所については、依然として確認にいたらないが、建物は、ほぼ詩人ロングフェローの子C・A・ロングフェロー(Charles A. Longfellow)の居宅を譲りうけたものとみられる(鈴木範久「立教発祥の建物とC・A・ロングフェロー」『コミュニティ福祉学部紀要』創刊号、一九九九年三月三一日。チャールズ・A・ロングフェロー著 山田久美子訳『ロングフェロー日本滞在記』平凡社、二〇〇四)。

その地を居留地一九番とする旧説（最近川崎晴朗氏も主張）以外にも、筆者は、和田秀豊に一八七四年九月一四日に堅信礼の施された「教室」（二三番の向かい）（ウイリアムス文書）すなわち新栄町五丁目九番あたり、あるいは和田の語る「今の入舟町の洗熊の近所」（『基督教週報』五巻三号、一九〇二年三月一日）も可能性を認める。ただし、後者は移転後かもしれないが、詳細は略す。その特定できない現状にしたがい、一九九九年、聖路加国際病院敷地内に建てられた「立教学院発祥の地」の記念碑は、単に「1874/C・M・ウイリアムス主教／立教学校を開く」との表現にとどめた。

立教大学校

立教学校を立教大学校にする構想は、一八八一（明治一四）年六月三〇日付でウイリアムスによって送られた伝道局あて書簡に見出される。当時、日本で大学を名乗っている学校というと、官立では一八七七年に発足した東京大学と工部大学校、私立では右の築地大学校ぐらいしかなかった。なかでも日本の将来に大きな役割を期待されている東京大学が、無神論的、唯物論思想に覆われつつある状況に、ウイリアムスは大きな危機感を抱いた。そのため早急に「設備のよいカレッジ（a well equipped

college)」の設立を訴えた。(Spirit of Missions, November and December, 1881. 『立教学院一二五年史 資料編 四』二〇〇。にも収録)。

ウイリアムスは、同時に前年派遣されたガーディナー (James M. Gardiner) を立教学校の校長とした。ガーディナーはハーヴァード大学出身の建築家でもあり、その設計による新校舎の建設を、近くの居留地三七番の土地に開始した。

一八八三（明治一六）年一月六日、立教大学校の開校と生徒募集の広告が、『朝野新聞』に次のように掲載された。

今般新築に転校し規則改正本月八日より開校し

英学漢学を教授す尤入舎生八十名を限りとす

築地新栄町

三十七番地

立教大学校

ほぼ同文の広告は、同月八日および九日の『東京日日新聞』、月末の二六日の『時事新報』にも掲載されている。志望者が少なかったのであるうか。五月一五日の『時事新報』にはさらに生徒募集の広告を見る。新校舎は美しい尖塔を有し、東京見物の人々も訪れるほどであったという（『立教学院学報』四号、一九〇九年二月一

五日)。建築家として今日までも名を残すガーディナーの設計だけはあった。立教大学の開校にともない従来
の立教学校は「閉業」された。

残念ながら開業願書の類が残されていないため、開校
当時の公式のカリキュラムなどは明らかでない。しかし、
同年一月に刊行された『東京諸学校規則一覽』(小田
勝太郎編、英蘭堂)に、「立教大学校規則」が収められ
ている。時期からみて開校当時と同じものと認められる
ので、その前文を引用しておく。

第一条 本校ハ基督教ニ基キ左ノ教科ヲ設ケ卒業年
限ヲ六ヶ年トス

第二条 学科ヲ分テ正則変則ノ二科トシ亦タ正則ヲ
分ツテ六級トシ変則ヲ分テ四級トス

但シ一級ハ一年ニテ卒業スルモノトス

第三条 別ニ漢学科ヲ設ケ生徒ヲシテ兼習セシム

続いて正則六級、変則四級、漢学科の科目(あるいは
教科書)名が記されている。ただしカタカナ表記のため
に誤記が少なくない。そこで当時広く使われていた英文
教科書や立教大生校生の回想談などを参考にして英語名
に戻し、正則(正則)の六年分を示すことにする。(カッ
コ内は著作者名)

正則第一級

Third reader (Willson), Word book (Swinton),
Primary arithmetic (Franklin), Easy lessons in
popular science (Monteth).

正則第二級

Fourth reader (Willson), Language primer
(Swinton), Elementary arithmetic (Franklin),
Comprehensive geography (Monteth).

正則第三級

Fifth reader (Willson), Universal history
(Parley), Lesson arithmetic (Franklin),
Physiology (Foster), Dictation.

正則第四級

Practical lesson in English (Sill), Analysis
(Greene), History of England (Gardner),
Elementary algebra (Robinson), Fourteen
weeks in physics (Steele).

正則第五級

History of the United States of America
(Higginson), Rhetoric, Geometry (Went-
worth), Fourteen weeks in chemistry (Steele),
Advanced physiology, Moral science.

正則第六級

Outlines of word history (Swinton), Mental philosophy. Logic, Trigonometry, Science of government. Physical geography. Geology.

このカリキュラムから、大別して二つのことが判明する。第一は、英学を中心とし英語の教科書によるといえ、教科目は広く人文、社会、自然にわたり、まさに、カレッジ教育が目指されていた点である。第二は、「基督教ニ基キ」とうたいながら、キリスト教関係の科目がひとつもない点である。前述の築地大学校には、同じくカレッジを目指しながら、いくつかのキリスト教科目があった。そこで、少しばかり、この二点を考えてみたい。

カレッジ教育

アメリカでカレッジというばあい、一般には教養カレッジの高等教育機関をさす。一部には教員養成などの専門職業教育のカレッジも存在する。教養カレッジでは当然リベラル・アーツといわれた科目の教育が中心となる。カレッジの入学資格は中等教育の修了である。これとユニヴァーシティとの関係を見ると、カレッジだけで終える完結コースと、ユニヴァーシティに進んで専門を深め

るための準備コースとがみられる。カレッジとユニヴァーシティとの関係をユニヴァーシティの側からみるならば、その中にカレッジを含むものと含まないものとのある（森昭『アメリカの大学』、黎明書房、一九四九）。

アメリカのカレッジを代表する学校のひとつがマサチューセッツ州にあるアマスト・カレッジである。そのアマスト・カレッジの教育に大きな貢献をした学長がシーリー (Julius H. Seelye) だった。シーリーの教育信念は「カレッジの力は壮大な建物、豊富な基金、多数の学生にあるのではなく、スタッフの高い品格と有能で誠実な仕事にある」との主張に見出される (A History of Amherst College, 1895)。

その具体化は、当時アマスト・カレッジに在学した内村鑑三の回想によく反映している。内村は、入学に際してアマストとハーヴァードとのいずれを選ぶか迷い、結局、両者を比較して前者とした理由を、こう述べる。

純粹智識にして若し予の欲する所ならん乎、予は勿論「ケムブリッジ」を選ぶべきなり、其規模の大にして其機関の整頓せる、其社交的勢力の強大にして其交際界の広闊なる、米国大学中「ケムブリッジ」の右に出づるものなし、智を慕ふもの、名を好むもの、交を求むるものは「ケムブリッジ」を撰びて他

を省みず、米国青年の華は彼処にあり、富者権者智者才子の集合所、重に当世人士の眼を注ぐ処なり。

「アマスト」は全く其趣を異にす、地は僻、校は大ならず、其学风は古式を重んじ、突進を忌んで漸進を守る、(中略)「アマスト」の重んずる所は寧ろ徳にありて智にあらざり、主義にありて事業にあらざり、鍛錬にありて識量にあらざり、人を離れて自然と自然の神とに交はるにあり(『流竄録』)

内村は、ボストンのケンブリッジにあるハーヴァード大学と田舎にあるアマスト・カレッジとを比較し、最終的に、小さくとも人間形成に重きをおく後者を選んだのであった。

同じころ、内村と札幌農学校で共に学んだ親友の宮部金吾はハーヴァード大学、新渡戸稲造はジョンズ・ホプキンス大学に学んでいた。実は、この三人の学んだ札幌農学校は、アマスト・カレッジ出身の、あの名高いクラーク(William S. Clark)の大きな影響を受けた学校であった。のちに新渡戸は、札幌農学校時代の教育を回顧して、札幌農学校は農学校というけれども、「農学などは一週間に三時間か四時間位のもので、他は哲学とか、文学とか、わけのわからないやうなものを習った」(『内観外望』、実業之日本社、一九三三)と述べている。

札幌農学校は、官立の学校で専門的実業学校の名もっていたとはいえず、実態は、まさにアマスト・カレッジを模した教養カレッジだったとみてよい。そのために、内村鑑三、新渡戸稲造、志賀重昂というような逸材を生み出したといえよう。また、札幌農学校は多くの中等教育の教員を育てたが、教科書汚職事件が発生したとき、高等師範学校出身者のなかには少なからず逮捕者が出たのに対し、札幌農学校出身者にはなかった。人間形成を重視する教育の結果とみなされた。

ウイリアムスが目指した立教大学は、まさに、そのようなカレッジであった。アマストから神学校への進学者が多く出たように、立教大学からも同じことが期待された。

立教大学が生まれた秋には、先の築地大学は、横浜の先志学校と合併、学校名を東京一致英和学校に改めた。そのため、しばらく「東京に大学校二あり、一は本郷に又た一は築地に在り」と呼ばれるように、東京大学と立教大学の二つをもって大学の代表とみた時代があった。しかも、いわゆる角帽(Mortar-board)を最初に着用して都内を「闊歩」したのは立教大学在校生といわれる(前掲『立教学院学報』四)。

キリスト教教育

ウィリアムスの立教大学校開設の意図は、せっかく立
教学校で学んだ生徒が、東京大学などに進学すると、無
神論および唯物論的思想にまみれてしまう心配に基づい
ていた。それならカリキュラムに、キリスト教科目が反
映してよいはずなのに、右に見たように開校時において
は皆無である。

その後、一八八七（明治二〇）年には、大阪にあった
英和学舎すなわち聖テモテ学校の吸収合併がある。翌年
の「立教大学校規則」によると、「基督教確証 (Evidences
of Christianity)」と「聖書 (Bible)」が加えられて
いる（『立教学院百二十五年史 資料編三』、一九九九）。
合併が影響しているのかもしれない。また、年は不明だ
が、当時の科目を記載した「立教学院歴史」では、やは
り「教会史」と「聖書講義」の科目がみられる（『築地
の園』三二、一九〇一年六月二七日）。いずれも聖書は
チャプレンのウィリアムスが担当している。

合併前の時期において、特別にキリスト教関係の授業
を考慮しなくて済んだ理由として、聖公会の聖三一神学
校の存在と寄宿舎とがある。聖三一神学校は、立教大学
校の新設にともない、その校舎の東側の一部に一八八八
年まで設けられていた。寄宿舎は同じ三階に置かれ、八

〇名を収容できた。しかも学生のほとんどが寄宿生であ
る。チャプレンのウィリアムスも二階に居住した。こう
してみると、学生たちは、同じ新校舎で一般の教科を受
ける以外は、生活のすべてがキリスト教的環境に取り囲
まれていたといえる。

後の時期にキリスト教関係科目が加えられても、注意
すべき規定が、一八八八年の「立教大学校規則」のなか
にある。その第二八条の「祈祷」に関する次の定めであ
る。

通学生ハ授業日ノ早禱及ビ日曜日ノ早禱若クハ晚禱
ニ出席スベシ寄宿生ハ日曜日及ビ毎日ノ朝夕祈祷ニ
兩度トモ必ず出席スベシ

ここには明らかに通学生と寄宿生との区があり、通学
生が単に「出席スベシ」とあるのに対して、寄宿生は
「必ず出席スベシ」と強い表現になっている。みずから
進んで入った寄宿生には十全のキリスト教的環境を提供
しつつ、通学生には、それを強制していいないのである。

実は、一八九九（明治三二）年に、文部省から発せら
れた「訓令十二号」に対して、立教は、とくに学校にお
ける宗教教育の撤廃を重視せず、簡単に「訓令」にした
がった。それは、日ごろの寄宿舎などにおけるキリスト

教活動で十分とみたためだった。他のキリスト教学校には、立教の態度につき、キリスト教教育の後退とみる見方もあったが、立教においては、それまでの実績に十分裏付けられた行動だったのである。「訓令十二号」に対する立教の対応に関しては大江滿「立教学院初代総理アーサー・ロイド」、『立教学院史研究』四、二〇〇六年三月二五日）にくわしい。

これは立教中学時代の話になるが、校長の元田作之進は立教の教育の方針を「徳育に重きを置き、人格の完全した生徒を養成するといふこと」にあるとして、次のように語っている。

聖書クラスなどが設けてあるとは云つても、これは生徒の徳育に資せやうとするので、如何してもこれに加はらねばならぬと云ふのではない。生徒各自が宗教に就いての信仰を持つ、持たぬは各自の自由である。従つて普通の宗教学校のやうに、朝祈祷もせなければ礼拝も行はぬ（『中学世界』一一二巻三号、一九〇九年三月二日）。

宗教信仰の強制を除こうとする配慮は当然だが、ここでは「聖書クラス」への参加も自由であると記している。

大学校の終焉

立教大学校の開校した一八八三年という年は、第三回全国基督教信徒大親睦会の開催された年である。各地でリバイバルが起こり、このまま行くなれば、日本全国のキリスト教化も夢ではないと思われた時代であった。ところが、一時的には歓迎されたキリスト教主義学校も、一八八九（明治二二）年の「大日本帝国憲法」発布のころから、国粹主義、日本主義の機運が高まり、志願者の減少が見られ始める。

前述したように立教大学校のカリキュラムは、すべて英語の教科書を用い、教師もおもに外国人であった。これに対して学生側からも、教科と教員に日本の学校としての性格を求める改革の要望が出た。この結果、学監として左乙女豊秋を大阪から招き、一八九〇年に学制とカリキュラムの改革が行われた。なによりも大きな変更は、名称を立教大学校から立教学校に復したことである。それは、官立でいうと尋常中学三年から高等中学二年までにあたる五年間にしたためだった。もはやカレッジとはいえず、せいせいジュニア・カレッジ程度にしたのである。一八九六年からは、ただの立教尋常中学校にまでしてしまつた。

立教大学校時代は、わずか八年で終わった。立教大学

の名前が再興をみるのは、専門学校令によるものではあるが一九〇七（明治四〇）年まで待たねばならなかった。正式の大学令による立教大学の出現は一九二二（大正一一）年であった。

カレッジ教育の影響

立教大学という名前をもったカレッジ時代は八年間にすぎなかった。しかし、その後、立教学校、立教尋常中学校に変わっても、立教大学時代に在籍した学生が幾人か残っていた。卒業生のみならず、その人々には立教大学の影響をみる事が可能である。立教大学校にかわった人々の、後の人生をのぞいてみよう。

大須賀（石井）亮一はウイリアムスの影響を受け、日本で最初の知的障碍を持つ子供たちの教育施設滝乃川学園を創設した。

小野田鉄弥は、小橋勝之助とともに孤児救済施設博愛社を創設、同社の岡山孤児院との合併により岡山孤児院に移る。岡山孤児院の創設者石井十次の亡き後、宮崎県茶臼原に移った同施設の教育部長として事業を継続推進した。

杉浦貞二郎は、ペンシルヴァニア大学に留学して哲学、神学を修め、帰国後、陸軍大学教授などをへて立教大学

学長に就く。

岩佐琢蔵は、立教女学校教員をつとめたのち、フェリス女学校に勤め副校長として外国人校長を助ける。のち立教大学学監に就任。

早川喜四郎は、パークレイ神学校に学び、帰国後、青森、和歌山の牧師をへて大阪の聖ヨハネ教会の牧師になる。のち平安女学院院長をつとめた。

小林彦五郎は、エピスコパル神学校に学ぶ。帰国後、青森の聖アンデレ教会の牧師をへて立教女学校校長となる。

このように立教大学校の卒業者には、聖公会の教職はもとより、教員としては、とりわけ女子教育に尽くし、また社会福祉事業に従事する人々の多いことが目につく。カレッジ教育の特徴を、少数の学生に対する教養教育と宗教的教育、人格的感化に求めるならば、卒業生たちの進路に、その影響を認めることができるであろう。

この傾向は、この後、立教学校、立教大学へと受け継がれ、立教の学風、伝統を形成していることは別に述べた『納函記念録』復刻版「解題」、二〇〇一。「立教Yの誕生」「交わり 伝道 ボランティア」、立教大学キリスト教青年会、二〇〇六。

新制立教大学への影響

戦後の学制改革による新制大学としての立教大学は、一九四九（昭和二四）年に発足した。新制大学の理念の大きな特徴は一般教育科目の名で呼ばれる教養科目の設置にある。戦時中は、一時、寄付行為から「基督教主義ニヨル」との言葉をはずし「皇国ノ道ニヨル」としていたが、戦後ふたたび「基督教主義ニヨル」が復活した。この二点はカレッジとしての立教大学校の理念の展開に通じる。そこで、この二点にしばって影響をみてみよう。

人文科学、社会科学、自然科学の三系列にわたる一般教育科目の設置は、すべての新制大学に共通して課せられた。その立教大学における独自の展開を求めらば、専門学部がいずれも教授会を持つのに対し、一九五五年、一般教育課程の担当者たちにより独立した一般教育部が作られ、教授会として独立したことである。それは全国的にも珍しい事例であったため、各地から視察に訪れたほどである。立教大学が、とりわけ教養教育を重視した表れだった。

一般教育部教授会で記憶に残る出来事の例を一、二話そう。当時は出席管理が厳しく、一定時間以上の出席がなければ合格できない。そのうえ、ほとんど必修科目であったから、一科目でも出席不足があると進級できない。

ある学生がオリンピック競技に日本代表として出場、それにより出席不足が生じた。しかし、その期間の欠席は結局認められず、その学生の進級はかなわなかった。

世間では、一般教育科目の担当者よりも専門科目の担当者の方がエライとする見方があった。しかし、実は立教大学一般教育部教授会では、同じ学問でも専門を教えるのはやさしいが、教養科目を教えるのはむずかしいとみる姿勢があった。教員の採用人事には、その点を重くみた。したがって、一般教育部教員としては認められなかったが、直後に、東京大学をはじめ専門学部の教員になつた人々が少なくない。

しかし、問題点もあった。高校の科目の繰り返しとされる授業や大教室でのマスプロ教育に対し、不満がつつあつた。これに対し、主体的な学習をうながすための選択科目の充実と拡大、教養科目の全学年への配当の必要につき、早くから立案、何度か提案をくりかえしてきた。しかし、専門学部の理解をえられず、その実現は学生たちの問いかけを待たねばならなかった。

次に、もうひとつの柱であるキリスト教教育について述べよう。戦後、立教大学が新制大学になってから、「キリスト教倫理」という科目が、全学生に必修科目として課せられた。この必修規定も、右の改革に際しては外された。これについては、キリスト教主義にもとづく

立教大学という見地から、いろいろな批判が寄せられた。ここでは、当事者の一人として答えておきたい。必修科目から外した理由は大別して二つである。

第一は、大学の入学生の変化である。立教がキリスト教主義大学であることによるのでなく、偏差値による志望が増したためである。このため必修を宗教の強制とみて学習意欲の減殺傾向の生じたことによる。

第二は、第一の理由と関連する。大学の教科が学問であることは、「キリスト教倫理」に関しても例外でない。ところが担当者により伝道との混同がみられた。それを一度清算する意味もあった。

なお、必修から外したことにより生じた結果について一言付け加えよう。必修時代は、毎年の受講者は約三〇〇〇名であった。それが、選択制になっても数の上ではほとんど変化を招かなかった。このことは、ほぼ全学生が、在学中に「キリスト教倫理」を受講して卒業していることを意味する。

必修から外すかわりに計画していたことで、直後に実現しなかったことを記すと、立教大学はキリスト教に基づく大学であって仏教に基づく大学でない。その特徴を出すためには、キリスト教関係の科目（たとえば、キリスト教音楽、キリスト教美術、キリスト教文学など）を多く用意すること、そして、それらのキリスト教科目群

のなかから、ひとつは選択して卒業するという選択必修の計画である。

結語

立教大学校のカレッジ教育にみられた特徴として主として三点にしぼって述べてきた。もう一度まとめておこう。

第一点は、はば広い教養教育による人間形成

第二点は、強制されないキリスト教にもとづく人間形成

第三点は、教師と学生との人格的接触を介した人間形成

このことで未だ忘れたい出来事がある。それは大学が封鎖されていたある日、大須賀潔総長、尾形典男総長室長、赤司道雄一般教育部長、野口定雄学生部長らの会合の席に、着任してまもない私が陪席していた。陪席した理由は学生に近いというただけだった。紛争が始まったとき、私が気づいたことのひとつは、運動の主だったリーダーの多くが、日ごろ顔見知りだったことである。

今だから率直に書くと、会合では、学部教授会を背景とする学内政治や学生自治会の動向が分析され、それと関連づけた打開策が話題にのぼっていた。しかし、最後

に導かれた結論は、人間としての学生を見失わない対応を第一とする方針だった。

また、即戦力を求める社会的要求に応じるための専門学部重視と拡大の声に対し、立教大学は、あくまでマスプロでなく中規模の学生数にとどめ、都市型の教養大学で行くことの確認であった。

私は、そこに集まった人々（今はすべて故人）の見識と良識とに非常に心強さを感じた。（なお、のちに一般教育部から文学部に移籍したとき、文学部の手でまとめられた事件の歴史を読む機会があった。そこには、身近な出来事ひとつに対する見方の大きな相違を発見し驚かされた。歴史理解における、見方や立場の相違をつくづくと知らされたのである）

立教大学では、一九九四年、一般教育部は解体となり、全学共通カリキュラムが始められた。その評価については、まもなく池袋を去り、大学を去った私には聞こえてこない。だが、ここに見た立教大学校時代のカレッジ教育の精神は、いつまでも受けつがれ、生かされることを期待してやまない。